

ために子供には迷惑千万なお稽古事などを漚わせるの類もその一例である。

家庭を浄化してお互に真心のこもつた励ましあい、助けあい、愛しあいをする地上の樂園を実現して頂きたい、これが第三である。この為には婦人……殊に母の……の自覚をまず取り上げなければならぬ。もつとどつしりと大地に根をおろし、なやみ苦しみ凡てをのり越えて、天に宝をつむ高い理想に母親が生きる時、子供は真に子宝としての光を放つものである。換言すれば母の犠牲の精神によつて子供の魂が成長するのである。

斯くして浄化された美しい家庭と行き届いた幼稚園、この両者が協力して補いあいつつ幼児の指導にあたる時に幼な子に対する教育は最高の水準に迄高められて行く事を信ずるものである。

(松沢幼稚園主任)

幼稚園に望む

——子供と共に——

佐藤久子

この四月に、四人目の女の子を幼稚園に送る私は、昭和十一年より足かけ五年、幼稚園の保姆をつとめました。あの頃私と遊んだ子供達はもう大学に入りそしてお嫁にいく子もいます。つい先達も嬉しいおめでたの便りに、早速お祝を送ろうと小包を作りながら、私はまだあの頃の楽しかつた自分の姿と、今の世帯疲れた自分とが、別の人間でもあるかのような錯覚をおこしつつ、包みに紐をかけていたのでした。

長男、次男、長女と三人を同じ幼稚園に入れ、私は世の常の母親と同じように、遊戯会に、遠足に、運動会にと、いそいそと子供と出かけました。でも、時々忘れものをした時のように子供の通つている幼稚園がもの足りなく思われ、覗いては悪いような気もしながら覗かずにはいられません。

「先生は、ちつとも遊んでくれないよ、よそのおかあさんとお話ばかりしているの、あとはお掃除よ」

「ふーん」

「只今」……と子供が帰れば、つい口ぐせになつて、

「今日は何してきたの」

と、口から出てしまいます。

「なんにもしてこないさ。ただ遊んできただけ」

「どんなことしてあそんだの」

「いろいろなこと、いつもとおんなじことだよ」

子供は面倒臭そりに外へかけ出します。

でも時には、「今日は紙芝居と幻燈面白かつたよ」「今日は人形芝居面白かつた。」と帰つて来ています。でも、「先生とかけつこしてね。」とか、「先生とかくれんぼしてね。」とか「先生と何々してね」といつたことはありません。

広いお遊戯室も、広い庭もない幼稚園に、二百人もの子供がただゴチャゴチャと集つているその中で、先生は子供とかけつこどころか、かくれんぼをする余裕もないことは分つていますが、子供は（家の子ばかりでなく）先生は『先生』であつて、只監督者であり、時には紙芝居、人形芝居を見せてくれる先生であつて、自分等の仲間などとはトンデモナイという心を心得ています。

でも私はまた過ぎ去つた昔の自分の姿をすぐに思い出さずにはいられません。私は「先生」ではなかつた。みんなの仲間だつた。遊ぶことが嬉しくつて楽しくつて、子供と競争して朝早く出かけていつたあの頃のこと。仕事（例えば粘土細工でも切り紙でも絵を描くことでも）なんか、その時その時で、どこでも、ブランを立てずにやつたりやらなかつたり、時には一人か二人と向きあつて一時間も二時間も續けて（こつちが夢中になつて）やることもあれば、熱心にやつている子をほおりつばなしにしてほかの子と野原へ出かけていつてしまつたり、一人づつ自転車にのせて、広い学校の校庭を順番に四〇回もまわつたり、悪者になつてみんなに縄でしばら

れ、「お帰り。」になつても誰もといてくれないで先生（この私）が涙をボトリとおとしたら、みんなあわてて、やつと縄をといてくれたことなど。芝ふの上で男の子とさかだちしたり、スケートしてあんまり面白くつてみんな家へ帰すのを忘れてしまつたり、私はいつもガキ大将で、子供は一人残らず私のあとにくつつきまわつていました。それも私が若かつたせいでしょうか。

なんと今の幼稚園の先生方は、あまりにも偉すぎて近よりがたいことでしょう。若気の至りとはいえ全く冷汗ものだつたと、今更首をちぢめてみても取かえしがつきません。

大体、市内の幼稚園、保育所などでも、年配の保母さんが多く、師範（昔の）出の方や、小学校の助教をつとめたような人が多いようです。「教える」という觀念、「子供達をまとめる」という考えがいつもどこかにひそんでいるように思われます。そして人には「見せる幼稚園」であるようです。

幼稚園としての、また保育所としての条件が悪いというとは、先生だけを批判する場合、非常にお氣の毒にも思いますが、世の中の状況がしらすしらすにそうさせたのかも知れません。子供自身がまとまりのない、先生自身が頼りどころのない、テンデンバラバラの感じがします。こんなような風潮にどうしてなつて来たのでしょうか。幼稚園の先生をせめる前に、この時代の大きな流れというもののへの批判をこそ、

我々母親は持たなければならぬとおもいます。

私の家へは毎日ピアノや歌を習いにたくさんの子供達が通つて来ます。(主人の職業)低学年や学令前の子も多いので、家の子供は年中幼稚園の中で暮しているようなものですし、私もまた十何年も子供から離れた生活をしたことがありません。子供の中に暮し、子供と共に生きてきました。子供らは少しも大人のように異つてはいませんの。

ただ、この頃の子供の多くは、すばい、つこく、ぬけ目なく、利巧すぎると思うこと(これは私のきらいな子供のタイプ)ここにはたくさんの学校があるのに、毎年各幼稚園からは競つて大学の附属小学校を受験させます。試験前の一二ヶ月は先生も父兄も血眼で知能テストを始めます。(子供の中にも或いは自覚してやつている子もあるでしょうし)

「今年は何々幼稚園からは何割入りましたね、あそこの幼稚園に入れておけば附属入学はまちがいないでしょうよ」

「何々幼稚園の先生は不熱心でちつともテストをして下さらないから来年この子の下は別の幼稚園にするつもりですよ」
「幼稚園に入れないので、あそこの子はとうとう落ちましたよ、やはり幼稚園で教えて頂かなければ駄目ですわネ」

そんなわけで昨年あたりから幼稚園の希望者が定員を超過して、今度は幼稚園に入るのにテストで落ちる者が出てきました。

なんとかいい幼稚園に入りたい、又附属小学校に入りたい熱心な母親達は、どうかしてという熱心さがあまつて、先方のごきげんを伺いに度々参上するようになります。先生方もつい母親の熱心さにほだされて子供と遊ぶ時間より父兄とお話をする時間の方が長くなりがち。また「我が幼稚園こそは附属合格者を一人でも多く出さなければ」と暗黙のうちに先生方も張合つていらつしやることでしよう。

全くその間子供達は何をしているのでしょうか。学校なんか本当はどこだつていいのです。(子供の本当の心は)でも幼稚園でも家でもいちめられます。

「お宅の××ちゃんなんかこんなにお利巧ですもの、どんなテストでもさつさとキピンに出来ますもの、本当に大丈夫でございますよ」

と幼稚園の先生に一言いつて頂ければ、どこの母親も眼に涙がたまるほど嬉しく、そうおつしやつて下さる先生がありがたく神々しくさえおもわれます。そして幼稚園の先生方もそうゆう子供なら、なおさら特別扱い大事にしなければなりません。

どうでもよい子はどうでもよいのです。ほおつておいてどこかしらの学校にはゆけるのですから。

そんな幼稚園であつても、家の子はこの四月から幼稚園に入れるということがどんなにどんなに嬉しく待遠しく待たれ

て、毎日曆に○をつけているのです。

「××子、幼稚園になんていかなくてもいいね、こんなに毎日たくさんお友達が来ていつしよに歌もうたえるんだから」

「いやよ、だつておべんとうないもの、家には運動会も遠足もお遊戯もないもの」

私が本気で言つてると思つて、子供はびつくりしたように私をにらみます。

「そうね、やつぱりいこうね、もつともつと大勢のお友だちがいるからね」

私も、もうそろそろおべんとうや草履袋を買つてやらなければなりません。

スカートも靴もそろえなければなりません。なんとなく、それも子供と同じように嬉しいことの一つになつて幼稚園の入園を待たれる世の當の母親の一人です。

子供が幼稚園に入つたら、みんなと仲よく楽しくおもしろい遊びでくるとそれでもいいと願いつつ。

(福島市 渡利舟場十五)

幼稚園に望む

— 家庭から —

大熊 米子

幼稚園にのぞむ、と云う題を頂いて、私は今更に、私共親子の幸を、深く思い返さないでは居られません。それは、母親の、心の故郷とも云うべき母校で、母親の恩師います幼稚園で、三人の吾子が皆揃つて、大切な幼児期を、次々過ぎて頂きまして、今日末の子がそこを巣立たせて頂いたのをございます。家庭から幼稚園への希望というものは、すべて叶えられ……いえ、母親は、何を幼稚園に希望する暇もなく、吾子には、次々素晴らしい環境が与えられてゆきました。幸福な母親は、ただ、其のすべてに、いつも後から子供の喜びと共に、喜び感謝して居る有様だからでございます。

でも、私は与えられた題に対して、責を負わねばなりません。私は今此処で、吾子三人の幼稚園生活の中で、特に有難く感じた事どもを、思い出して「母親から幼稚園にのぞむ」